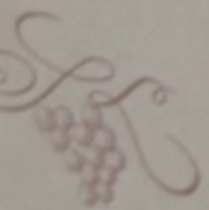


# 死ぬつて パパ？ 苦しいことの、

山田佳江

新潮文庫

グウェイ短編集  
(一)  
久保康雄訳



死ぬって苦しいことなの、パパ？

---

「物語とはこうあるべきなんだ」

と父は言った。私は寝袋のシャカシャカとした感覚に包まれている。そうして私は、もう三十年以上も、その言葉に囚われ続けている。

私と妹がまだ幼かった頃、父は私たちをよくキャンプに連れていった。フリーのデザイナーで多忙であった父にとって、『旅行の計画を立てる』ということは皆無だった。

私たちは、父に約束をしてもらったことが無い。それは守られる可能性が低いから。そのかわり、父のキャンプは唐突に始まる。

小さな私と妹は、夜眠っているところを抱きかかえられ、後部座席をフラットにしたステーションワゴンに積み込まれる。テントや釣り道具、クーラーボックスとともに。そうして目が覚めると、朝靄の久住高原に居たりするのだ。

その日も父のキャンプはいつの間にか始まっていた。私は深夜に、ステーションワゴンの中で目を覚ます。妹が母に抱かれて眠っている。私はここがどこなのか分からないけれど、よくあることなので気に留めない。

父は私の隣で、小さなマグライトを使って本を読んでいる。

「お父さん、なに読んでるの」

「ヘミングウェイ短篇集」

まだ三十歳の父が、まだ十歳にならない私の質問に答える。

「面白い？」

父はそれに返事をせず、小さな声でその本を朗読してくれる。短編のひとつの、なぜだか終わりの数行だけ。

＊

「死ぬって苦しいことなの、パパ？」

「いや、そんなに苦しくはないと思うよ、ニック。時と場合にもよるがね」

二人はボートのなかに腰かけていた。ニックは鱸に腰かけ、父が漕いだ。太陽が山の向うからのぼりかけていた。鱸が一匹はねあがって、水面に波紋を描いた。ニックは手で水をかいた。朝のきびしい冷えこみのなかでは、水があたたかく感じられた。

早朝の湖上で、父の漕ぐボートの鱸に腰かけていると、自分はけっして死ぬようなことはないのだと確信した。

＊

そこまで読み終えてから父が  
「余韻のある終わりがただろう」  
と私に言った。

「よいん」

「他の作家ならあと一ページ書くところを、ヘミングウェイはここで終えるんだよ。物語とはこうあるべきなんだ」

そう言って父は、また読書に集中してしまう。幼い私は、物語の余韻について考えながら眠りにつく。

父のキャンプは唐突に始まり唐突に終わる。それが終わってみるまで、私たちは何泊する予定なのか知らされない。

父の釣った虹鱒を焼いて食べたり、野草の名前を教えてもらったり、のんびりと過ごす時もある。テントを張ったと思ったら、数時間後にはもう畳んで、下山する時もある。余韻どころの騒ぎではない。

あれから数十年、私は母になり、父は年老いた。父は脳梗塞を患い、身体は動かなくなり、喋ることもままらなくなかった。

ヘミングウェイなら、もしくは父なら、ここで物語を書き終えてしまうのだろう。

だけどそれから数年後、父は回復する。あのまま寝たきりになってしまうのかと思っていたけれど、母に怒られつつ、嫌々ながらにリハビリをし、三歳の孫と全力で鬼ごっこができるほどの元気を取り戻す。（いつも負けてしまうのだけれど）

あの時の父の年齢を、とうに越した私は、作家志望として、公募にかすりもしない小説を書き続けている。

「物語とはこうあるべきなんだ」

私はその言葉に未だ囚われている。けれど何年書き続けても、物語をどう終わらせるべきなのか、私には分からない。